Ⅱ　資料の収集・研究成果の公開
―博物館資源センター―

［概　要］

博物館資源センターは，資料の収集・管理と，研究成果公開の場である展示を中心とした，博物館事業を所管している。これらを効率的に運営するため，資料・修復担当者および情報・知財担当者による資料担当者会議，展示担当者による展示担当者会議，ならびにくらしの植物苑運営会議をふまえ，月例の博物館資源センター会議を開催して，実施に当たった。

１．資料の収集・製作・保存管理

博物館における研究とその成果公開としての展示を行うために，資料の収集と保存管理はきわめて重要な事業である。資料収集は，共同利用性・継続性・柔軟性の３点からなる基本方針に基づいて進めている。以下，2021年度の受け入れ資料の一部についてその概要を述べる。

購入資料としては,「万年筆関連資料」,「東鑑」（全79帖),「兼仲卿暦記　自正安二年正月二十二日至三月二十九日」など,既存の館蔵資料を補完･充実させるものが挙げられる。また,昨年度に引き続き,第５展示室･６展示室リニューアルに向けて，日露戦争関連の「日露戦争紀念壽語録」「戦時日記」，漁業権に関する絵図「オホーツク海沿岸漁区明細図」，昭和初年の子供向けＮＨＫラジオ講座のテキスト「コドモのテキスト」など，関連資料の収集を進めた。

受贈資料としては，「廣瀬産院資料」（9点）など，既存の助産院資料を補完するもののほか，共同研究「家内における死者祭祀・祭具の現在とその歴史的検討：変容するモノ・家族・社会」（2020～2022年）の成果として収集され，第４展示室の特集展示「亡き人と暮らす―位牌・仏壇・手元供養の歴史と民俗―」（2022年３月15日～９月25日）において公開された「唐木仏壇一式」（29点）など,「博物館型研究統合」の理念にふさわしい資料を収集した。

また，昨年までと同様に正倉院古文書の複製製作のほか，企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」（2022年３月15日～５月８日）や第２展示室リニューアルを見据えた複製資料として,「渋谷定心置文」「祥兼（益田兼見）置文」などの複製製作を実施した。

保存管理については，資料保存環境検討委員会の助言の下に，引き続き文化財害虫調査や，温湿度，資料コンディションなどの調査を進め，環境の改善や対策を検討した。

２．展示活動

歴博は，歴史資料・情報の収集，整理，保存，公開という一連の機能を有する大学共同利用機関であり，特に，研究資源の収集と研究と展示とを有機的に連関させる「博物館型研究統合」というスタイルで，研究の成果および情報の発信を行っている。展示については，総合展示および企画展示，特集展示，くらしの植物苑における特別企画，人間文化研究機構の基盤機関が連携して展示を企画・実施する連携展示などをその具体的な活動として挙げることができる。

企画展示では，２つの企画展示を開催した。「学びの歴史像―わたりあう近代―」（2021年10月12日～12月12日）は，共同研究「学知を教育から見直す近代日本の歴史像」（2018～2020年度）の成果に基づいて，19世紀後半以降，日本列島に近代国民国家が成立していく様相を，「人々は何を学んできたのか」という視点から描いたものである。来館者各自のモバイル端末で音声を聞いてもらう試みや，非接触型のタッチパネルなど，コロナ禍での展示の工夫は概ね好評だったが，６つの展示コーナー間の連関についての説明が十分でなかったなどの課題も残された。本展示の成果は,第５･６室（近･現代）のリニューアルに反映される。「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」（2022年３月15日～５月８日）は，武士団を戦闘集団ではなく「領主組織」という観点から捉え，13世紀～15世紀を中心に，地域を支配する領主組織としての武士団の姿を明らかにするものである。共同研究「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」（2016～2018年度）の成果をベースとする企画展示であり，文献･考古･民俗･歴史地理･美術を専門領域とする研究者による学際的地域研究の成果を効果的に示す展示となった。今年度は，総合展示第２室（中世）のリニューアル委員会が2022年度に発足することが正式に決定され,本企画展示の成果も第２室（中世）リニューアルに生かされていくことになる。

企画展示室における特集展示「黄雀文庫所蔵　鯰絵のイマジネーション」（2021年７月13日～９月５日）は，国内最大級の規模を誇りながら，従来公開されることのなかった黄雀文庫所蔵の鯰絵コレクションを通して，未曽有

の災害に遭いながらも，たくましく乗り越えようとした江戸の民衆の豊かな想像力について，江戸の都市文化の文脈から考察した企画である。200点以上の鯰絵を全点カラーで掲載した資料的価値の高い図録も，専門家から高い評価を得た。会期中に緊急事態宣言が発出され，観覧者数が伸び悩んだことが残念である。

第３展示室の特集展示「『もの』からみる近世」では，当館が所蔵する紀州徳川家伝来楽器コレクション（162件）から，琴や箏の仲間の楽器をとりあげ，多彩な「こと」を比較できるように展示した「紀州徳川家伝来の楽器－こと－」（2021年５月25日～７月４日）を開催した。また，「江戸のビスタ」（2021年12月21日～2022年１月30日）では，家並みや並木のある通りを遠くまで見通した景色を描く名所絵を特集した。

第４展示室の特集展示では，「エビスのせかい」（2021年７月27日～2022年１月10日）を開催し，漁師が着用した晴着の万祝や商家のエビス講を描いた錦絵など約50点の資料により，エビス信仰の諸相を紹介した。

くらしの植物苑では特別企画として，例年の４種の植物に関する各展示に，少しずつ新たな視点を加え，「伝統の桜草」（2021年４月13日～2021年５月５日），「伝統の朝顔」（2021年８月３日～2021年９月５日），「伝統の古典菊」（2021年11月２日～2021年11月28日），「冬の華・サザンカ」（2021年11月30日～2022年１月30日）を開催した。

また，第３期中期計画の最終年度であったことから，第３期における人間文化研究機構の可視化・高度化事業を総括する展示として，「地域社会との連携による展示実践―人間文化研究の可視化・高度化―」（2022年１月18日～２月13日）を開催した。多様な空間での展示を可能する装置として開発した「可搬型展示ユニット」を活用し，各機関の研究の特色とともに，異分野連携・地域連携による人間文化研究の可能性や展望を紹介した。

３．情報発信

歴博の資料収集方針にもとづき蓄積された資料は，資料調査プロジェクト等により，研究資源として有効利用されるために必要な情報が付与され，館蔵資料データベースとして公開されているが，さらに踏み込んで，より高次の研究情報を付与した目録・図録，あるいはコレクションに特化したデータベースなどの形で公開されている。

博物館資源センター長　内田　順子